

令和元年6月21日現在

機関番号：25301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K21376

研究課題名(和文) 作品解釈と作者の意図に関する分析美学的研究 戦後日本の前衛美術を中心に

研究課題名(英文) On the Authorial Intention in Interpretation: Focusing on Japanese Postwar Art

研究代表者

河合 大介 (KAWAI, DAISUKE)

岡山県立大学・デザイン学部・准教授

研究者番号：10625495

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、芸術作品の解釈において作者の意図を重視するか否かという美学的論争の問題点を明らかにすることである。そのために、1. 美学的論争の再検討、2. 具体例として、戦後日本の前衛美術、特に赤瀬川原平の作品と文章の分析、3. 美術史における解釈の実践についての調査、4. 哲学分野における意図概念に関する研究を行った。

その結果、作者、美術史家、哲学者と比べて、美学者たちが解釈における作者の意図を特権的に扱っていることがわかった。したがって、今後は解釈における意図の役割を他の資料とフラットに位置づけて、解釈と意図との関係を再考する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、作品解釈における作者の意図の役割について再検討の必要があることを明らかにした。すなわち、これまで美学分野では、解釈について考えるときに、意図が中心的な位置を占めてきたが、この構図を刷新し、あらたな視点から理論を再構成するための第一歩となる点で、学術的に重要である。また隣接の学問領域に対しても、一方で美術史研究における解釈行為が各人の恣意的な価値基準によってなされるのではないことを、他方で哲学研究にとっては、日常的な行為や発話における意図との違いを示すことで、意図概念に関する研究を促進するという点で、学術的な意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify the problems in the aesthetic debates between intentionalist and anti-intentionalist. It consists of (1) reexamination of the aesthetic debates, (2) research on the Japanese Postwar Art, especially, Akasegawa Genpei's work and texts, (3) investigation of the interpretative practices by art historians, (4) study of the concept of intention in philosophy.

These considerations make it clear that philosophers of art, unlike artists, art historians, and philosophers, overestimate the role of authorial intention in interpretation. It leads us to reconsider the role of intention, not as conclusive evidence, but as one of the various sources for interpretation.

研究分野：美学

キーワード：分析美学 戦後美術史 意図主義 美術史 匿名性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、1950年代に端を発し、欧米を中心とした美学・芸術哲学において長く議論が続いている、作品解釈における作者の意図の役割に関する研究である。本研究では、とりわけ、戦後日本の前衛美術を具体例としてこの問題に取り組む。

近代以降、作者が自作について発言する機会が激増し、また、ロマン主義的な芸術観が浸透した背景もあり、作品研究と作家研究の境界が曖昧となった。実際、20世紀初頭には、作品の意味を作者の感情や思想を表現したものであるか、それとも作品そのものが表現するものであるかという議論が起こった(T・S・エリオット「伝統と個人の才能」[1919]、C・S・ルイス、「個性理論の異端性」[1939]など)。こういった流れの中で、作品を作者や背景といった文脈から切り離し、作品そのものだけに基づいて解釈をすべきとするニュー・クリティシズムが生まれた。

美学における解釈と意図をめぐる論争の発端となったのは、このニュー・クリティシズムを象徴する論文とされたM・ピアズリーとW・ウィムザットによる「意図の誤謬」(1954)である。この論文では、作品が作者の意図的行為による成果であることは認めつつも、解釈において作者の意図は参照できないし、すべきではないと主張された。このような立場は「反意図主義」と呼ばれることとなる。こういった潮流に対して、E・D・ハーシュは、著書『解釈の妥当性』(1967)において、改めて意図の重要性を主張した。そこでは、作者の意図がなければ解釈の妥当性を決定する基準がなくなり、解釈行為の目的が消失するという点が問題視された。意図の重要性を擁護する立場は「意図主義」と呼ばれ、反意図主義との間で様々な論争が繰り広げられた。

こういった議論を経て、それぞれの立場はその欠点を修正しつつ、20世紀末には、おおよそふたつの立場が主流となった。ひとつは、N・キャロルやR・ステッカーに代表される「穏健現実意図主義」である。彼らは、作者の意図が作品そのものと矛盾しない限りにおいて、作者の意図を尊重する立場である。もうひとつは、J・レヴィンソンによる「仮想意図主義」である。これは、作者の現実の意図はともかくとして、作品や文脈などから作者の意図を構築し、それを基準とするものである。両者の立場は、その出発点こそ大きく異なるが、いずれの立場から解釈してもほとんど同じ結果になる。したがって、争点は、「作者の意図」をいかなるものとして捉えるかに集約されると言えるが、その決着はいまだついていない。

こういった議論と並行して、芸術作品そのものについて、1960年前後に大きな変化があった点も重要である。それまでの芸術作品は、絵画や彫刻のようにひと目見れば芸術作品であることがわかるような、伝統的な材料と形式によって制作されていた。しかし、A・ダントーがポップ・アートの作品を例に指摘したように、新しい芸術作品のなかには、芸術ではないものと知覚によっては区別できないものが登場した。それらを理解するために、ダントーは、歴史や理論といった作品外のような要因を考慮すること、彼がアート・ワールドと名付けたものが要求されると主張した。このことは、作品そのものだけを対象とするような極端な反意図主義の立場にとっては難問として立ちふさがる。

他方で、この変化は世界で同時に起こったものであるが、日本に独特な特徴として、「匿名性」がある。これは、1960年代の若い前衛美術家たちの活動に見られるものであり、美術批評家の宮川淳を中心に「匿名性」と「無名性」に関する論争が起こったし、また、匿名的な芸術グループのハイレッド・センターのメンバーでもあった赤瀬川原平の活動に顕著に現れていた。こういった作品の匿名性は、意図主義者たちにとって、作者の意図への参照を妨げる要因となる。

したがって、意図主義をめぐる議論における「意図」の意味を明らかにするという課題にとって、現代の芸術作品と作者との関係を問い直すことが必要となる。

2. 研究の目的

上述の背景から、本研究では、まずこれまでの意図主義を巡る議論を整理し、そこで「意図」という概念がどのように理解されているのかを明らかにする。そのうえで、意図の概念や作品解釈における意図の役割を、哲学および美術史の分野の研究を参考にすることで再検討する。また、作品解釈と作者の意図との関係については、特に日本の戦後美術に関する調査によって、伝統的な芸術作品の解釈とは異なる点を明らかにする。また、その成果は、前者の美学的議論の再検討においても重要な役割を果たすものである。

3. 研究の方法

本研究は、(1)主に美学における意図主義に関する議論の研究、(2)戦後日本の前衛美術に関する研究からなる。これに加えて、美術史や哲学における関連事項に関する研究も必要に応じて行う。

(1)については、これまでの美学における意図主義に関する文献を精読し、再検討する。(2)については、戦後日本の前衛美術に関する資料の調査、収集、分析を行う。また、当該分野を専門とする研究者に助言を仰ぐ。あわせて、哲学分野の関連文献の調査および哲学研究者と研究会や意見交換を行う。また美術史研究者とも同様である。

4. 研究成果

2015年度は、本研究の基礎を固めるため、必要な情報の収集と問題点の洗い出しを中心に進

めた。(1)については、美学分野におけるこれまでの議論の全体像を把握することと、哲学分野における意図にかかわる議論についての調査をおこなった。美学分野の調査については、意図をめぐる議論の主要な論文の精読をすすめた。哲学分野については、哲学研究者を招いたシンポジウムを開催し、専門家の意見を求めた。そこでは、美学において用いられている「意図」の概念と、哲学分野における「意図」の概念との間に相違が認められた。このことから、その相違点がどこにあるのかを探求することが次年度以降の課題として浮かび上がった。

(2)については、資料の所在の調査と、「匿名性」に関する研究を進めた。資料調査については、赤瀬川が少年時代を過ごした大分を中心に、学芸員や存命作家の協力を仰いだ。特に、大分の新世紀群と福岡の九州派についての資料を調査した。並行して、赤瀬川原平の活動における「匿名性」の問題について、論文を発表した。そこでは、赤瀬川に匿名性という考えが生じたのは、中西夏之や高松次郎らが行った「山手線事件」というイベントに触発されたことだったことが明らかになった。すなわち、匿名性は、当時の若き前衛芸術家たちの間に共有されていた問題意識であることがわかった。

2016年度は、前年の研究結果をふまえて調査・研究を進めた。(1)については、引き続き美学関連文献の調査と精読を行った。その一環として、ピアズリーとウィムザットの論文「意図の誤謬」の翻訳を行った。(2)については、1970年前後までの赤瀬川原平に関連する文献の収集を行った。それらの資料をもとに、彼の千円札作品を発端として起こった「模型千円札事件」についての研究を進め、その経過を東京文化財研究所での研究会で発表した。これらの研究から、赤瀬川が自らの千円札作品について説明する際に用いた「模型」という概念は、作品制作時に念頭にあったのではなく、いわば後付けで考え出されたものであることが明らかになった。このことは、作者による作品の説明が、必ずしも制作時に明確になっていたことではないということを示している。これら赤瀬川研究と並行して、ニューヨーク在住の同時代の美術家である篠原有司男氏へのインタビューを行い、1960年代の作家たちの問題意識や影響関係について聞き取りを行った。

2017年度は、(1)については、作品解釈における作者の意図が、特に美術史の実践においてどのように扱われているかを調査・検討することで、美学理論へと反映させることを目指した。そのために、これまでの研究を踏まえた研究内容を、美術史研究者を中心とする研究会において発表し、意見を仰いだ。その結果、美術史においては、作者の意図(を示す資料)は、他の客観的な資料と同様に、他の資料や作品との整合性に基づいてその正当性を検証された上で、根拠として用いられていることがわかった。このことは、美学理論における意図の特権性が特殊であるということを示しており、その位置づけの再検討が必要であることを明らかにした。(2)については、前年度の赤瀬川研究を発展させ、成城大学美学美術史学会において学会発表を行い、それをもとに同学会誌に論文を発表した。これらの研究によって、赤瀬川の千円札作品に関する説明が、単に後付けというだけではなく、その説明が徐々に変化していったことも明らかになった。したがって、作者の意図を参照するという場合、どの時点の意図を指しているのか、そもそも意図というものは何を指しているのかということをもより明確に規定する必要があることがわかった。

2018年度は、これまでの研究を踏まえて、総合的な考察を行った。まず、意図の概念が作品解釈にとって特権的ではないこと、さらにそもそも意図という言葉で何を指しているのか明確ではないことが問題だった。このことから、哲学分野の関連文献の調査と精読を行うとともに、哲学研究者との意見交換を行った。その結果、美学分野において用いられている意図の概念が独特なものであり、その概念自体について再定義が必要であることがわかった。他方で、これと関連して、現代アートにおける作者の意図についても、赤瀬川の研究から、それが制作時に明確になっていないことがわかってきた。そうでありながらも、意図が重視されるのは、ダントーらが論じたように、現代アートの作品を理解するためには、作品の外的な情報を考慮する必要があるからだということもわかった。しかし、やはりここでも、意図が外的な情報として特権的に位置づけられる理由はない。これらのことから、今後の課題として、一方で、意図の概念を明確にすること、他方では、現代アートの作品を解釈するという行為そのものが何を目的とし、何を手がかりとするのかを検討し直す必要があることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

河合 大介、「《模型千円札》理論の形成主体に関する考察 赤瀬川原平著作の分析を中心に」、『成城美学美術史』、査読有、24号、2018年、pp.1-15.
<http://id.nii.ac.jp/1109/00005122/>

河合 大介、「赤瀬川原平と《山手線事件》 匿名性 を手がかりとして」、『美術研究』、査読有、418号、2016年、pp.270-282.
<http://id.nii.ac.jp/1440/00006079/>

〔学会発表〕(計3件)

河合 大介、「美術史研究における作家資料の役割に関する分析美学的考察」、美術史方法論研究会、慶應義塾大学、2017年12月2日。

河合 大介、「《模型千円札》理論の形成主体に関する考察 赤瀬川原平自筆文献の分析を中心に」、成城美学美術史学会2017年度第1回例会、成城大学、2017年9月15日。

河合 大介、「《模型千円札》をめぐる赤瀬川原平の理論形成に関する予備的考察」、東京文化財研究所文化財情報資料部研究会、東京文化財研究所、2017年1月31日。

〔その他〕

河合 大介、「アーサー・C・ダントー『ありふれたものの変容』(松尾大訳)」、図書新聞、3341号、2018年、3面。

河合 大介、「赤瀬川原平」、『日本美術年鑑 平成27年版』、東京文化財研究所、2017年、pp.516-517。

河合 大介、「ウィムザット&ピアズリー『意図の誤謬』(翻訳)」、『フィルカル』、2-1、2017年。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。